

漱石と鷗外は何故すごいのか

Junko Higasa 2014.7.8

明治の文豪というとき、夏目漱石、森鷗外の名が挙げられる。それはこの二人が、表現したのは文学という分野であるけれど、内容は文科と理科という両方の視点を持っているからだ。漱石は文学、美術のほかにも数学にも強く、物理学、生物学も理解する。そのため「文学論」の数式が成り立つ。鷗外は医学と文学の両方を修めている。そして漱石はロンドンに留学し英訳をこなし、鷗外はドイツに留学し独訳をこなす。二人とも海外に出て、外から日本を眺めるということを経験している。その客観的視点を持ちながら、経済性に重きを置く社会制度に疑問を投げかけ、人間性を追求しているのだ。したがって彼らのすごいところは、一個人にとどまらない、一社会にとどまらない、世界的に共通する生物学的「人間全般の存在性」を表現したところにある。漱石はその視点を自らの体験の中で習得した。鷗外は医者である。当然生物学には詳しい。したがって人間を扱っているのであるから、この二人の文学は既に古典でありながら、内容は未来である。だから 21 世紀の今日も生き続けているのだ。いや、人間が人間という生物である以上、これからも生き続けるだろう。

多くの文学は、その時々を映すが、それは「文学」という一分野にとどまっている。この二人は文学と科学を融合させた文学者である。そこが本物のグローバルとして愛される理由だと思う。